

一〇二五年一月八日

小春日の障子を過ぎる鳥の影 澄子  
宮島の鳥居射抜きて秋日落つ 康子  
苔寒し神話の国之力石 もとこ  
柿花火朝日が包む一軒家 山椒  
庭手入れ済みましたかと色鳥来 うつぎ  
冬うらら寝顔のままに母逝きぬ せいじ  
臨終の祈りの窓に寒夕焼 あひる  
石蕗の花日差しに応ふ窓辺かな よし女  
歌碑巡る枯葉の径を踏み鳴らし  
一〇二五年一月七日

立冬の日だまりに読む一句集 みきえ  
穏やかに冬立つ朝や鍬仕事 千鶴  
庭石の壅みの翳や石蕗の花 うつぎ  
ゴンドラの影の縫ひゆく紅葉山  
一〇二五年一月六日

明日香 康子 澄子  
和繁 みきえ もとこ  
和繁 みきえ もとこ

一〇二五年一月四日

海原の深き藍色秋深かむ なつき  
落葉敷く野外チャペルの石の椅子 むべ  
ひつぢ田の尖る葉先に雨の珠 えいじ  
鳥どちのレストランめく七竈 む  
踏まずんば参拝ならず銀杏の実 うつぎ  
折り鶴を孫に褒められ文化の日  
一〇二五年一月三日

倒されど神輿太鼓の鳴り止まず みきえ  
夕映えの天守に架かる時雨虹 千鶴  
御神燈仕舞ひて末社冬に入る あひる  
毎日句会みのる選・一〇二五年一月一〇日  
一〇二五年一月二日

心字池縁取る石蕗の花明かり みきえ  
どんぐりやちやんで呼び合ふいとこ会 むべ  
冬霧の大和三山漂ひて 千鶴  
一〇二五年一月五日

米寿の師喜寿の子集ふ菊日和 あひる  
行く秋や束の間の陽を纏ふ樹々  
一〇二五年一月五日